

Title	地域社会における宗教者をめぐるネットワーク： 福岡県ウツシ霊場篠栗の事例からみて
Sub Title	
Author	Lamotte, Charlotte
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.168- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

その後、2011年4月のモンパ出身の州首席大臣のヘリコプターによる事故死とその後継者選びを巡っての州内の混乱があり、自治地域要求は、立ち消えになったかに見えたが、2013年になってまた運動が再開されている。第6付則の適用外でありながら自治を獲得したアッサムのボド領域県の例があり、まったく不可能ではないが、自治要求が州内の他の地域の人びとからは、州を分断するものだと反発の声がある。アルナーチャルは北東諸州のなかでは平和な州だとされてきたが、近年、トライブ間の対立が表面化している。そうした状況の中での要求であるため、モンパの人びとの間でも戸惑いがある。

先行研究の中で、ポータ語要求を、ヒマラヤ地域との「想像の共同体」意識によるもので、ポータ語で教えようとしているものが、モンパの文化ではなく、チベットのものだという批判がある [Gohain 2012]。モンパの言語要求が「想像の共同体」意識によるものであることは、それが母語でないことから同意できるが、この批判の中では、モンパが、チベット文化圏の中にあり、モンユルもチベット文化の一端を担ってきたことが無視されている。

言語や自治という国家を相手にした要求の場合、当然、「われわれ意識」をもったトライブ集団なり、民族集団という単位が必要になる。この二つの運動は、行政上の名づけである指定トライブの「モンパ」が共通のアイデンティティをもった「モンパという民族」となることを目指し、国家や州内における自らの存在の再定位をはかる過程とみなせるのではないだろうか。

注

- 1 アルナーチャル・プラデーシュ州はかつて北東辺境管区 (North East Frontier Agency: NEFA) と呼ばれていたが1987年に州に昇格した。1914年にシムラー協定でイギリス、チベット政府間で合意された中国とインドとの国境、マクマホン・ラインによってインドが実効支配しているが、中国はそれを承認せず、1962年には中印国境紛争が起きた。現在も中国が州のほぼ全域の領有を主張している。係争地であるため、州への入域には、特別許可が必要である。

参考文献

- Anderson, Benedict. 1983 *Imagined Communities: Reflection on the Origins and Spread of Nationalism*. London: Verso. (アンダーソン『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆・さや訳、書籍工房早山、2007)
- Aris, Michael. 1980 *Bhutan: The Early History of a Himalayan Kingdom*. New Delhi: Vikas Publishing House.
- Gohain, Swargajyoti. 2012 Mobilising language, imagining region: Use of Bhoti in West Arunachal Pradesh. *Contributions to Indian Sociology*. (46): 337–363.

地域社会における宗教者をめぐるネットワーク

—福岡県ウツシ霊場篠栗の事例からみて—

ラモット・シャルロット

福岡県の東北部に位置する篠栗新四国霊場は「日本三大新四国霊場」の一つで、本四国のウツシ霊場である¹。篠栗町内に八十八カ所の札所があり、年間に篠栗を訪れる人々の人数は20万人を超える。全国から多くの参拝者や遍路²が集まり、南蔵院を総本寺とする「地方霊場」として栄えている³。天保6年(1835)に尼僧の慈忍が創設し、藤木藤助が完成させたと伝わる⁴。元来は本四国へ行けない人のた

めに創設され、当初は弘法大師信仰に支えられていたが、時代と共に人間の願いも変わり、現在では現世利益の願いが多く、併せて追善供養が行われ癒しの場としても機能している。篠栗は大都市の福岡市の近郊に位置し、都市部から比較的近い距離にあるにもかかわらず、時代の変化に合わせて、一般の人々から宗教的職能者に至る幅広い宗教活動の場になってきた。八十八ヶ所の札所や、番外⁵、そして巨大な仏教寺院で多くの納骨堂を持つ南蔵院、数多い小祠や小堂など、狭い地域に集中した宗教施設があって独特の雰囲気を作り上げ、修行者や霊能者を惹きつける空間として現代社会に適応した祈願が行われている⁶。最近でも、福岡市では霊能者と呼ばれる民間宗教者が活躍して、誰にも言うことができない心配事や悩みを持つ人々が篠栗の札所や寺院に相談にくる場合も多いという。現代ではスピリチュアルな活動と呼ばれているが、篠栗にもその影響が及びつつある。こうした動きは現代の特徴と言えるが、類似した動きは歴史的に長く継続してきたのであり、多くの宗教的職能者がその担い手であった。

篠栗の場合、宗教的職能者では、修験の役割が大きかったが、僧侶、盲僧、巫者などもおり、半僧半俗の祈禱師が活躍してきた。彼らは流動的で、地域社会のウチとソトを往来し、宗教世界を活性化してきた。篠栗では新四国霊場によって外部世界とのチャンネルが生まれ、時代の変化に応じて宗教性を変容しつつ維持してきた。特に、春と秋を中心に、定期的に訪れる講集団の遍路と地元との交流は、札所巡りに伴う「接待」の慣行で結びつき、地域社会のウチとソトの連関を強化してきた。小規模で密度の高い霊場は、常に動態的な状況を維持する場として凝集性を発揮してうまく機能したといえる。霊場の一番札所の南蔵院は真言宗寺院で、高野山の権威を背景に卓越した指導力を駆使して、時代に対応し、良くも悪くも、全体を統合する役割を果たしてきた。現在でも、多様な宗教的職能者は、「霊能者」や「拝み屋さん」などと呼ばれ、地域社会に根付いている。また、「行者」と言われる人々も多く活動して、本人自身は靈感がないと考えていても、また信者がついていなくても「修行」を行う人たちとして個人的に活動している。ただし、時には「靈感」を得るための修行も行うので、霊能者になる可能性もある。篠栗では「拝み屋さん」と「行者」の区別は明確ではない。篠栗は時代の変化に対応し宗教的職能者との関係性を巧みに保ちつつ、地域社会として生活を維持してきた⁷。

霊場形成の初期には、札所の堂守は農家などの在家の人々が主体になって運営していたが、世代が変わると、宗教的職能者が次第に担い手になってきた。札所も初代以降の次の世代になると、担い手を程度させて僧侶とし、正式に寺院になっていく所もある。堂守には篠栗町のソトから移り住んできた者が多い。ソトから来た遊行宗教者（行者・修験・巫女）が、篠栗に定着して自分のお堂を建てたり、札所の管理人の堂守として活動を継続してきたという伝承は数多く聞く。最近では福岡市の発展で篠栗はベッドタウンとなって団地が増え、普通の町と同じようになってしまったが、随所に霊場の面影は残っている。巡礼者、参拝者、行者、堂守、僧侶、巫女などを介したウチとソトとの頻繁な交流と往来は減少傾向にあるが、現代でも姿を変えつつ確実に継続しているのである。篠栗は神仏混淆の世界から観光や癒しの場所へ、霊場からパワースポット⁸へと姿を変えて宗教性が広く浸透し、独自の地域社会を形成していると言える⁹。

本研究では篠栗における宗教活動、特に現代の「修行」と呼ばれる行為を主体として検討したいと思う。霊場は特別な場所で、巡礼の実践が伴うことは普通であるが、篠栗は四国遍路の写し霊場として名高いだけでなく、近くの町や福岡市内の人々の「行場」とも考えられている。修験の拠点ではないが、篠栗霊場の奥の院とされる若杉山（684m）は宝満山修験の峯入りの道の途上であって、中腹の石井坊は中世後期以来の記録が残る修験であった。伝承では真言宗の開祖、空海が寺坊を開創したとも伝え、

古い山岳信仰の霊山で山麓の若杉集落が信仰を支えてきた〔鈴木 2013〕。現在では若杉山は霊場というよりも、福岡市内の人には人気のあるハイキングコースとして観光地になっている。しかし、若杉山の中腹にある番外の霊場で、明王院、通称「養老の滝」には、多くの行者が集まって滝行を行っている。若杉山の山林での自然との交流、霊場で「エネルギー」を浴びる活動が展開し、占い師やヨガ講師の訓練場として山林を巡ったり滝場での修行が行われる。最近では、若杉山や篠栗での「森林セラピー」や「遍路体験」などの新しい活動が始まり、現代の修験道に顕著な「体験修行」〔長谷部 2011〕とも共通する様相がある。近年になって篠栗の霊場を巡る大きな遍路団体や講集団は少なくなったが、新しいタイプの遍路や行者が生まれて篠栗に向かう。篠栗では多様性を基盤に、時代の移り行きと共に、遍路や修行の意味が急速に変化してきた。本稿では篠栗の現代の修行活動を通して、宗教性を再考する。

篠栗は本四国の「移し霊場」として、凝縮した「意味空間」を形成している。また、人々が暮らしを営む「里山空間」の中に八十八ヶ所が点在し、日常と非日常性が連続性を帯びている。寺社や祠が至る所にありながらも、人々が暮らしている生活世界でもある。篠栗は多様な目的を持つ人々をひきつける「磁場」(magnetic field)として作用すると言える。体験と信仰、修行と観光という二つの軸を想定してみると、修行と信仰に関わる「修験」、信仰と観光に関わる「巡礼」、観光と体験に関わる「ヒーリング」、体験と修行に関わる「体験修行」という四つの方向性を設定できる。本論文で強調した、篠栗の外との交流、特に行者や拝み屋さんの活発な活動は、まさしく最後の「体験修行」であった。こうしたウチとソトの交流が複雑に展開しているのが篠栗という地域社会である。篠栗は凝縮した「霊場」であるだけでなく、森と山と川と滝など魅力的で身近な自然にあふれ、人間味ある場所で、多くの人々を引き寄せる。

「霊場空間」を舞台として、ウチとソトの交流は様々な次元で「コンタクト・ゾーン」(contact zone)を形成し、多様な思想や実践がまじりあう異種混浴(hybrid ハイブリッド)の状況が展開している。ウチとソトの関係は優劣の関係ではなく、非対称性ともいえないのであり、関係性と状況に応じて複雑に展開し、想いもよらないような想像力が生まれる。篠栗新四国札所第一番で本格的な仏教寺院である南蔵院でもこの傾向は顕著である。「コンタクト・ゾーン」では、真正性や非真正性がまじりあい、明確に区別できない中で新たな創造力が発揮されている。こうした現象は現代社会の特徴であるとも言える。「磁場としての篠栗」を、今後もさらに深く探求してみたいと考えている。

注

- 1 三大霊場は知多四国霊場(愛知県)と小豆島四国霊場(香川県)と篠栗である。
- 2 四国八十八ヶ所の札所を巡礼でめぐる人々を遍路といい、篠栗も同じ名称で呼ばれる。
- 3 各札所の状況については〔井上 1993〕を参照のこと。
- 4 篠栗町誌民俗編』1990、『篠栗町誌歴史編』1982に詳しい。
- 5 八十八ヶ所以外の拝所を番外や番外札所という。
- 6 1980年代の篠栗の実態については、〔読売新聞社出版局・宗教考現学研究所編 1986〕で知ることが出来る。現在と比較すると、急速に変化しているが、したたかな持続性もある。
- 7 篠栗の概要は、〔篠栗町教育委員会編1982.1990〕、民俗については〔西 1982〕が詳しい。
- 8 パワースポットは1990年代の初めに超能力者と自称する清田益章が「大地のエネルギーを取り入れる場所」として提唱したが定着しなかった。2000年代に入ってスピリチュアリティを实践する江原啓之の影響やメディアを通じて広まった。
- 9 巡礼の新しい捉え方や、地域社会との関係性については前稿で検討した〔ラモット 2013〕。

参考文献

- 井上 優 1993『篠栗八十八ヶ所霊場めぐり』西日本新聞社。
篠栗町教育委員会編 1982『篠栗町誌歴史編』1982, 篠栗町文化財専門委員会。
篠栗町教育委員会編 1990『篠栗町誌民俗編』1990, 篠栗町文化財専門委員会。
庄崎良清 2007『おみくじー神仏の器となりてー』（藤田庄市・聞き書き）私家版。
鈴木正崇 2013「民俗社会の持続と変容ー福岡県篠栗町若杉の事例からー」『人間と社会の探究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』76号, pp.83-140。
中山和久 2008「模倣による巡礼空間の創造ー篠栗四国霊場の表象と実践ー」『哲学』119集（文化人類学の現代的課題II）慶應義塾大学三田哲学会, 65-109頁。
西 義助 1982『ささぐりくらしの四季』私家版。
長谷部八朗 2011「山の聖性と体験修行」宮家準編『山岳修験への招待ー霊山と修行体験ー』新人物往来社, 204-210頁。
読売新聞社出版局・宗教考現学研究所編 1986『九州・篠栗霊場の旅ー弘法大師の世界ー』東京読売新聞社。
ラモット, シャールロット 2013「巡礼と地域社会に関する方法論的考察ー篠栗新四国霊場の事例を通してー」『人間と社会の探究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』75号, pp.67-80。

発達障害児支援のための保育士トレーニングプログラムの開発と評価

松 崎 敦 子

発達に遅れや偏りがあるために、特別な支援を必要とする児童が増えている（文部科学省，2012）。保育所に通園する障害児の数、障害児を受けて入れている保育所の数ともに増加しており（日本保育協会，2010）、障害児支援に関する研修の充実が望まれている（高旗・中田・池田，2007）。

そうした現状をうけ、これまでいくつかの研修が実施され、その効果が示されてきた（田中ら，2011）。しかしながら研修の内容は、アセスメント方法、支援計画の作成方法、問題行動への対応方法を中心としたものが多く、支援技術に関する研修はほとんど行われていない。支援技術の向上には臨床場面における実践トレーニングが必要である、という海外での研究成果を踏まえると（Rose & Church, 1998）、今後、実践トレーニングを含めた研修プログラムの開発が求められる。

松崎・山本（査読修正中）は、児童発達支援事業所に勤務する保育士2名を対象に研修プログラムを作成し、その効果を検討した。研修は、講義（3時間）、実践トレーニング（30分×15回）、ビデオフィードバック（1時間×10回）で構成した。その結果、保育士の支援技術が向上し、介入終了から2ヶ月後の事後評価においても維持されたことが示された。また、参加児の発達も複数の評価指標において示された。しかしながら、保育所に勤務する保育士に、長期間・長時間の研修を実施することは、時間的制約が多い現在の勤務状況では困難である。

そこで本研究では、S市発達障害者支援センター（以下支援センターと表記する）と協同して、公立保育所に勤務する保育士を対象とした研修プログラムを作成した。S市公立保育所に所属する保育士11名とS市内の児童発達支援事業所に勤務する保育士2名を対象に研修を実施し、研修の効果を検討した。